

修身小學口授本

卷二

T1A1

22

Y 86

吉田利行編纂

版權  
所有

修身小學口授本

星文館藏版

修身小學口授本卷之二

目錄

吉田利行編纂

第一章

- 應仁天皇支那ノ文教ヲ資リ給フ事一丁
- 宇多天皇ノ御遺誡ノ事ニ丁
- 徳川公家康經籍ヲ刊行シ文教ヲ弘ムル事同丁
- 林羅山幼ヨリ學ニ志ス事同丁
- 中江藤樹幼時大學ヲ讀ミ志ヲ立ル事三丁
- 新井白石才學群ニ超ユル事同丁
- 吉田松蔭雄傑ニシテ大志アリシ事四丁

- 孟子ノ母機ヲ断チテ學ヲ勤メシノ事同丁
- 漢ノ匡衡壁ヲ穿チテ勤學セシ事六丁
- 晉ノ車胤螢ヲ聚ノテ書ヲ照セシ事同丁
- 司馬溫公背誦シテ書ヲ記臆セシ事同丁
- 夏寅君子ノ三惜ヲ語リシ事七丁

第二章

- 太宰春臺書ヲ讀ムニ精詳ナリシ事七丁
- 濟陽ノ江録書籍ヲ整齊セシ事同丁
- 明道先生字ヲ書スルニ甚ダ敬ム事同丁
- 柳公權筆ヲ用フルノ心得ヲ奏セシ事同丁

- 宋ノ黄山谷司馬溫公ノ書ニ跋セシ事八丁
- 尾張侯ノ明鑑天草時定ヲ疎斥セラレシ事同丁

第三章 敬慎

- 樂正子春足ヲ傷ヒ數月憂色アリシ事同丁
- 川井東山力ヲ持敬ニ專ニセシ事九丁
- 徳川公秀忠謹厚縝密ナリシ事同丁
- 漢ノ霍光小心謹慎ナリシ事十丁
- 頼春水謹密方正ナリシ事同丁
- 大野仁兵衛謹愍ニシテ主命ヲ重ンセシ事同丁

第四章

○越後ノ市郎兵衛早起晏寢幼儀ヲ修メシ事十一

○丹波ノ蘆田七左衛門夫妻毎夜心ヲ盡シテ父  
母ヲ安眠セシメシ事十二

○宋ノ黄履夙興夜寢シテ書ヲ誦セシ事同

○徳川公秀忠病ニ卧シテ梳ヲ廢セザリシ事同

○森蘭丸障子ヲ闔ゲテ主命ヲ重シセシ事十三

○徳川公家光天性幼儀アリシ事同

○北魏ノ楊津長ニ事フルノ禮ヲ盡クセシ事同

○明ノ楊翥夜夢ニ因テ深ク自ラ咎メシ事十四

○漢ノ王吉鄰家ノ棗ノ為メニ婦ヲ出セシ事同

○元ノ許衡路傍ノ梨實ヲ取ラザリシ事同

第五章 制欲 忍怒

○呂正獻公少ヨリ嗜慾ヲ寡クセシ事十五

○范文正公常ニ先憂後樂ヲ心トセシ事同

○野相公嗜好ヲ止メテ學業ニ志セシ事同

○嶋東臯三絃ヲ焚キテ學ニ志セシ事十六

○織田信長過ヲ改メ行ヲ勵ミシ事同

○皇甫謐游蕩ヲ止メ學業稼穡ヲ勤メシ事十七

○趙武孟游獵ヲ止メ力學シテ貴官トナル事同

○太宰春臺菅原麟嶼ノ安逸ヲ規戒セシ事同

○川井東村飲酒ノ好ミヲ止メシ事十八丁

○池部汝玉自ラ豪飲ノ過ヲ改メシ事同丁

○晉ノ陶侃酒ヲ飲ムニ限リアリシ事同丁

○紀長谷雄詬罵ヲ受ケテ爭ハザリシ事同丁

○藪内匠先登ノ功ヲ爭ハザリシ事十九丁

○伊藤仁齋其學術ヲ排撃スルヲ辨ゼザル事廿

○漢ノ張良怒ヲ忍ビ下邳ノ老人ニ履ヲ授ケシ

事同丁

○漢ノ韓信俛シテ少年ノ跨下ヲ出デシ事廿一

○張公藝九世同居シ家道雍睦ナリシ事同丁

○宋ノ富弼忍ノ字ヲ説キ子弟ヲ訓ヘシ事廿二

○明ノ夏原吉量ノ學ブベキヲ説キタル事同丁

第六章 誠直 慎言

○畠山重忠誠實ニシテ心ト言トニナキ事廿二

○森蘭丸誠直ニシテ君ヲ欺カザリシ事廿四丁

○河村權七出國シテ初ノ一言ヲ變ゼザル事同丁

○高允正直ニシテ死ニ臨ミ辭ヲ易ヘザル事廿七

○宋ノ徐積心ヲ直クシテ邪心アラザリシ事同丁

○劉元城司馬溫公ニ心ヲ盡クシ已ヲ行フノ要

ヲ問ヒタル事廿八丁



○宋ノ賈黯終身不欺ノ二字ヲ守リシ事同丁  
 ○寇萊公正直ニシテ君ヲ欺カザリシ事同丁  
 ○滋野貞主妄リニ人ノ善惡ヲ言ハザリシ事同丁  
 ○卓茂寛仁人ト爭ハズロニ惡言ナカリシ事同丁  
 ○明ノ蔡虛齋多言ナラザル人ヲ語リシ事同丁  
 ○謝安少言ノ徳ヲ以テ王氏兄弟ヲ評セシ事同丁  
 ○宋ノ王文正公平生言笑少ナカリシ事同丁  
 ○柳川滄洲雨森芳洲ノ輕言ヲ戒メシ事同丁  
 ○五井持軒平生人ノ惡ヲ言ハザリシ事同丁  
 ○文徵明人ノ過ヲ言フヲ喜バザリシ事同丁

○南容白圭ノ詩ヲ三復シ深ク言ヲ慎ミシ事同丁

第七章 改過積善

○後三條天皇一念ノ過ヲ悔イ給ヒシ事世一丁  
 ○瀧鶴臺ノ妻赤白二個ノ絲團ヲ製シ過ヲ改メ善ニ遷リシ事世二丁  
 ○北條泰時訟者ノ過ヲ改ムルヲ嘉ミセシ事世三丁  
 ○有馬侯頼永深ク自ラ其過失ヲ悔悟セシ事同丁  
 ○晉ノ周處過ヲ改メ學ヲ修メシ事世四丁  
 ○蔡齊賈存道ノ詩ニ感ジ飲酒ノ習ヲ改ル事同丁  
 ○李安遠少時ノ惡習ヲ改メ學ニ嚮ヒシ事同丁

○仁徳天皇徳ヲ積ミ民ヲ愛シ給ヒシ事世五丁

○奥貫友山父子四十八村ノ窮民ヲ救ヒシ事同丁

○三浦梅園小善ヲ褒シ小惡ヲ誡メシ事世六丁

○北魏ノ李士謙善ヲ積ミ徳ヲ施セシ事世七丁

○葛繁日々人ヲ利益スルニ心ヲ用ヒシ事同丁

○漢ノ王丹窮ヲ賑ハシ業ヲ勸メテ自ラ下邳ノ民ヲ富マセシ事世八丁

○宋ノ王榮善ヲ積ミ連リニ聰明ノ子ヲ得タル事同丁

○明ノ楊榮ノ祖父人ヲ救フヲ事トセシ事同丁

○宋ノ趙槩黑白二豆ヲ置キ善惡良念ノ起コルヲ驗セシ事世九丁

○明ノ楊瞻現在及ビ將來ノ福ヲ論ゼシ事同丁

○明ノ太祖其侍臣ト善惡應報ノ義ヲ論ゼシ事同丁



修身小學口授本卷之二

吉田利行編纂

第一章

○應神天皇十五年、百濟王其子阿直岐ヲ遣ハシ  
テ、良馬ヲ貢獻ス、阿直岐經典ニ通ズ、天皇皇太子  
稚郎子ヲシテ就テ學バシメ給フ且ツ之ニ問テ  
曰ク、汝ガ國ニ博士ノ汝ヨリ賢レル者アルカ、阿  
直岐對テ曰ク、王仁ト云フ者アリ、一國ノ秀ナリ、  
天皇乃チ荒田別ヲ遣ハシテ更ニ王仁ヲ徵シ給  
フ、百濟王王仁ヲシテ入朝セシム、論語十卷千字

文一卷ヲ獻ズ、我國彼ノ土ノ文教ニ資スル、此ヨリ始マル、

賴襄曰ク、道ハ一ノミ、道ノ天下ニ在ルヤ、日月ノ如キナリ、日月ハ天下ノ日月ナリ、一國ノ私有スル所ニ非ズ、道モ亦然リ、父子君臣夫婦ハ國トシテ之レ無キナシ、而メ慈孝忠義ハ皆自然ニ存ス、人作ヲ待ツ丁アルニ非ズ、我邦列聖民ヲ保スル丁子ノ如シ、其俗君ヲ尊ビ、上ヲ親ミ、相愛シ、相養フ、經籍ナシト雖モ、其道固ヨリ具サニ在リ、道豈彼此アラシヤ、之ヲ載スルニ

文ヲ以テスル、彼我ヨリ舊シ、彼來テ之ヲ貢シ、我取テ之ヲ用フ、釀治織縫ノエト、何ゾ異ナラシヤ、

○宇多天皇、寛平九年、秋七月、天位ヲ皇太子ニ禪リ、自ラ書ヲ著ハシテ、皇嗣ヲ誡メ給フ、之ヲ寛平御遺誡ト云フ、其中ニ言ヘル丁アリ、治ヲ有識ニ訪ヒ、道ヲ六經ニ求メヨト、皇太子ハ醍醐天皇ナリ、後世ノ政治ヲ言フ者、必ず延喜天曆ヲ稱ス、延喜ハ即チ醍醐天皇ノ年號ナリ、  
○徳川家康嘗テ言フ人、以テ道ヲ知ラザル可カ

ラズ。苟モ道ヲ知ラント欲セバ、書ヲ讀マザルベ  
カラズ。應仁以還、君臣相虐ゲ、父子相賊フ者、皆道  
ヲ知ラザルニ由ルト。是ニ於テ有司ニ命ジ、經籍  
ヲ刊行ス。是ヨリ文教大ニ行ハル。

○林信勝、羅山ト號ス。其先ハ加賀ノ人。後紀伊ニ  
徙ル。羅山年十四、京師ニ寓シ、書ヲ建仁寺ニ讀ム。  
時喪亂ニ屬シ、書籍甚ダ乏シ。乃チ百方索借シ、諷  
誦每子ニ曙ニ達ス。僧其髦俊ヲ奇トシ、強テ僧ト  
ナサント欲ス。羅山曰ク、童子決シテ父母ヲ棄テ  
ズト。乃チ趣レ歸ル。長ズルニ及ビ、益百家ヲ涉獵

ス。凡ソ字ノ冊ヲ為ス者アレバ、窺ハザル所ナシ。  
其浩瀚ヲ究メテ、要ヲ六經ニ歸ス。徳川家康其名  
ヲ聞キ、時ニ迎ヘテ咨諏ス。慶長中、遂ニ聘シテ博  
士ト為シ、以テ顧問ニ備フ。是ニ於テ林氏ノ學大  
ニ世ニ行ハル。

○中江與右衛門、藤樹ト號ス。近江國高島郡小川  
村ノ人ナリ。其祖大洲侯ニ事フ。父早ク没ス。祖ニ  
從テ大洲ニ在リ。年十一ノ時、一日大學ノ天子ヨ  
リ、以テ庶人ニ至ルマデ、壹ニ是皆身ヲ修ムルヲ  
以テ本ト為スヲ讀ミ、大ニ嘆悟シテ曰ク、幸ニ此

經ノ存スル、聖人豈學シテ至ルヘカヲザランヤ  
ト、奮然トシテ志ヲ立テ、沈心カ學、常ニ聖學ヲ興  
スヲ以テ、自ラ任トス、藤樹至性アリ、母ノ獨リ鄉  
ニ在ルヲ憂ヒ、屢情ヲ陳シテ、歸養ヲ請フ、大洲侯  
素ヨリ其人トナリヲ奇トシ、許サス、因テ遂ニ官  
ヲ棄テ、去ル、定省ノ暇、徒弟ヲ教授ス、常ニ人ヲ  
帥ウルニ躬ヲ以テス、人賢愚トナク、皆其德ニ服ス、  
一時稱シテ近江聖人ト曰フ、

○新井君美、白石ト號ス、江戸ノ人ナリ、三歳ニシ  
テ字ヲ寫シ、六歳ニシテ書ヲ誦ス、一日、父母携ヘ

テ戲劇ヲ觀ル、一々記認シテ之ヲ胸臆ニ置キ、歸  
テ之ヲ語ルニ、其次序一モ違フ所ナシ、父之ヲ異  
トシテ曰ク、此兒常人ニ非ズ、他日才當サニ文事  
ニ於テ發スベシ、新井氏其レ興ランカト、既ニ長  
ジテ、器資宏偉ナリ、之ニ加フルニカ學ヲ以テス、  
博覽強記、最モ和漢古今ノ典故ニ通曉ス、常ニ經  
世ヲ以テ自ラ任ズ、遂ニ幕府ニ事ヘ、徳川家宣ノ  
眷注スル所ト為リ、事巨細トナク、參預セザルナ  
シ、正徳元年、朝鮮使趙大億等、幕府ニ覲ス、家宣、君  
美ニ命ジテ接遇セシム、典例ノ舊ニ異ナル者、皆

君美ノ建議スル所ナリ君美玄冠緋袍劍ヲ按シ  
テ以テ禮文ヲ諍論ス大億語塞ガル反テ其才學  
群ニ超ユルヲ賞ス功ヲ以テ從五位ニ叙シ筑後  
守ニ任ズ

○吉田矩方通稱寅二郎松蔭ト號シ又二十一回  
猛士ト號ス長門國萩ノ藩士ナリ人ト為リ慷慨  
雄傑大志アリ名節ヲ以テ自ラ勵マス學ヲ佐久  
間象山ニ受ク安政中米魯事起ルニ及テ象山松  
蔭ニ謂テ曰ク方今ノ形勢苟モ男子タル者ハ海  
外ヲ遊ビ其工藝ヲ學習シ其智識ヲ弘メザルベ

カラズ且ツ邦人ニシテ屢海外ニ航セバ特ニ其  
事情ニ習慣スルノミナラズ併セテ操舟ノ術ニ  
熟セバ一舉シテ兩全ナリ他日ノ緩急ニ必ズ資  
用スベシト因テ之ヲ幕府ニ請フ許サレズ松蔭  
慨然トシテ以為ラク事苟モ國家ニ利アラバ罪  
ヲ得ルモ辭セズト遂ニ航海ノ志ヲ決ス會米艦  
下田ニ在リ松蔭間行シ至レバ則チ日已ニ暮ル  
海濱人ナシ因テ漁舟ヲ掠メ直ニ米艦ニ馳セ俱  
ニ航海セント請フ船將陂理對ヘテ曰ク日本政  
府ノ左券ヲ得ルニ非ザレバ肯テ許サズト人ヲ

シテ之ヲ下田ニ送致セシム

或曰久矩方開濟ノ大略ヲ懷キ施スルヲ得ズ此亦時勢ノ已ムヲ得ザル者唯毛利氏一藩ヲ以テ大勢ヲ挽回シ皇室ヲ翼戴シ今日ノ隆業ヲ開ク者皆矩方ノ名節ヲ以テ一藩ノ士氣ヲ鼓舞スルニ出ル者矩方之ヲ目撃スルニ及バズト雖モ亦以テ氣ヲ泉下ニ作スベキ也

○孟子既ニ學ンデ歸ル孟母機ヲ下リ學ノ至ル所ヲ問フ孟子曰久自若タリ孟母乃チ刀ヲ以テ其織ヲ斷チテ曰久子ノ學ヲ廢スル吾ガ斯ノ織

ヲ斷ッガ若キナリ孟子懼レテ旦夕學ヲ勤メテ息マズ孔子ノ孫子思ニ師トシ事ヘテ遂ニ大儒トナル

○漢ノ匡衡家世農夫ナリ衡ニ至テ學ヲ好ム家貧シクシテ燭ナシ鄰舍ニ燭アレ氏逮バズ衡乃チ壁ヲ穿チ其光ヲ引キテ書ヲ讀ム邑ノ大姓文不識家富ミ書多キニ名アリ衡乃チ其レガ為メニ傭エシテ報錢ヲ求メズ書ヲ得テ徧ク之ヲ讀マン丁ヲ願フ主人感歎シ資給スルニ書ヲ以テス遂ニ學大ニ成リ元帝ノ朝ニ丞相ニ進ム

○晉ノ車胤恭勤倦マズ博覽多通ナリ家貧ニシテ常ニ油ヲ得ルヲ能ハズ夏月ニハ練囊ニ數十ノ螢火ヲ盛リテ書ヲ照シ夜ヲ以テ日ニ繼グ寒素博學ヲ以テ名ヲ世ニ知ラル當時盛會アル毎ニ胤至ラザレバ皆云フ車公ナケレバ樂マズト○司馬溫公幼キ時記誦人ニ若カザルヲ患ヒ羣居シテ講習スルニ衆兄弟ハ既ニ誦ヲ成シ游息スレ氏溫公ハ獨リ帷ヲ下シ編ヲ絶チ能ク背誦スルニ及ビテ乃チ止ムカヲ用フルヲ多キ者ハ功ヲ收ムルヲ遠シ其精誦セシ所ハ乃チ終身忘

レズ、

○夏寅性聰異ナリ嘗テ坐客ニ語テ曰ク君子ニ三惜アリ此生學ハズ一ツノ惜ムベキナリ此日間ニ過グルニツノ惜ムベキナリ此身一夕ビ敗ルニツノ惜ムベキナリト當時以テ名言トス

## 第二章

○太宰春臺人ト為リ強カナリ書ヲ讀ムヲ精詳ニシテ一字一句モ苟モセズ點畫訛リアレバ必ズ更メテ止ム大小ノ筆墨刊行著述等皆親カラ繕寫シ遠近ノ書疏手答セザルナシ、



○濟陽ノ江祿書ヲ讀ミテ未ダ竟ハラザレバ急速ノ事アリト雖モ必ズ掩束整齊ヲ待テ然ル後ニ起ツ

○明道先生字ヲ書スル時甚ダ敬ム嘗テ人ニ謂テ曰久字ノ好カラシムヲ欲スルニ非ズ即チ是學ナリ

○唐ノ憲宗愛州ノ觀察判官柳公權ノ書跡ヲ見テ之ヲ愛シ公權ヲ以テ右拾遺翰林學士トス上公權ニ問フ卿カ書何ゾ能ク是ノ如ク善ナル公權對ヘテ曰久筆ヲ用フルハ心ニ在リ心正シケ

レバ筆正シト上默然トシテ容ヲ改ム其筆ヲ以テ諫メヲ容ルヲ知レバナリ

○宋ノ黃山谷司馬溫公ハ文潞公ニ與フル書ニ跋シテ曰久司馬溫公ハ天下ノ士ナリ所謂準繩ヲ左ニシ規矩ヲ右ニシ聲ハ律トナリ身ハ度トナル者ナリ此書ヲ觀ルモ猶ホ其風采ヲ想見スベシ余嘗テ溫公ハ資治通鑑ノ草ヲ觀シニ數百卷顛倒塗抹スト雖モ訖ニ一字ハ草ヲ作スナシ其已ヲ行フノ度蓋シ此ノ如シ

○天草時定幼ニシテ穎異ナリ書ヲ能クス八歲

時江戸ニ至ル、或之ヲ尾張侯義直ニ薦ム、義直  
召シ見テ、大字ヲ書セシム、末ニ至テ、紙幅迫窄ス、  
時定輒チ縦筆直下シ、引テ茵席ニ至ル、觀ル者、其  
豪邁ヲ歎ズ、義直獨リ以為ラク、此兒幼ニシテ貴  
ヲ陵グノ心アリ、長ゼバ、必ズ賊ヲナサン、近ヅク  
ベカラズト、遂ニ之ヲ祿セス、後果シテ亂ヲ作ス、  
人皆義直ノ明鑑ニ服ス、

### 第三章

○樂正子春堂ヲ下ルトキ、其足ヲ傷ビ、數月出デ  
ズ、門弟子曰ク、夫子ノ足瘳エタリ、數月出デズ、猶

ホ憂フル色アルハ、何ゾヤ、子春曰ク、善シ汝ノ問  
ヒノ如キナリ、吾之ヲ聞ク、天ノ生ズル所、地ノ養  
フ所、惟人ヲ大ナリトス、父母全クシテ之ヲ生ム、  
子全クシテ之ヲ歸スヲ、孝ト謂フベシ、其體ヲ虧  
カズ、其身ヲ辱カシメザルヲ、全クスト謂フベシ、  
故ニ君子ハ、頃歩ニモ、敢テ孝ヲ怠レズ、今予孝ノ  
道ヲ怠ル、是ヲ以テ憂フル色アルナリ、

○川井東村、年五十二垂ナントシテ、始メテ學ニ  
志シ、業ヲ山崎闇齋ニ受ク、東村闇齋ヨリ長ズル  
一、十四歳、闇齋曰ク、道ニ入ルハ、敬ニ如クハナシ、

當サニ持敬ヲ先ニスベシ、子不幸ニシテ時ヲ過  
グ、讀書ヲ必トセズ、實踐ヲ專ニスベシ、我只子ニ  
說與セバ、則チ每事體究スベシ、東村之ニ從ヒ、力  
ヲ持敬ノ說ニ專ニシ、敢テ少シク懈ラズ、其餘聞  
ク所、皆服膺シテ失フコナシ、闇齋其志ノ篤キヲ  
稱ス、

○台德公、德川秀忠、人ト為リ謹厚、縝密ナリ、嘗テ  
左右ニ語テ曰ク、人恒ニ言フコアリ、浮生夢ノ如  
シ、一寸先ハ暗ノ夜ナリ、時ニ及デ娛樂スベシト、  
此言大ニ謬マレリ、當サニ云フベシ、浮生ハ、真ニ

夢ノ如シ、浮生既ニ短ケレバ、益其身ヲ敬マザル  
ベカラズ、身ヲ敬ムノ時亦長カラザレバ、豈勤勉  
ヲ加ヘズシテ可ナランヤト、

○漢ノ霍光、禁闥ニ出入スルコト、二十餘歲、心ヲ小  
ニシテ、謹慎ス、未ダ嘗テ過アラズ、人ト為リ、沈靜  
詳審ナリ、出入ニ、殿門ヲ下ル毎ニ、進止常處アリ、  
郎僕射竊ニ識シテ之ヲ視ルニ、尺寸ヲ失ハズ、  
○頼彌太郎、春水ト號ス、安藝侯ニ事ヘテ、儒員ト  
ナリ、藩命ヲ奉ジテ、世子ニ、江戸ニ伴讀ス、春水素  
ヨリ謹密方正ナリ、一瞥ノ滑稽ヲ以テ進ム者ア

リ、常ニ諸士ニ狎戲ス、世子之ニ問フテ曰ク、頼彌太郎ニ逢フモ、亦能ク此ノ如クスルカト、醫默シシテ退久、此一事ヲ見テモ、以テ其平生ヲ概スベシ、燕居獨處ノ時ニ於テ、妻子ト雖モ、未ダ嘗テ其情容アルヲ見ザリシト云ス、

○土井利勝、嘗テ座間ニ七八寸許ハ唐絲ノ遺ヲタルヲ見テ、侍臣大野仁兵衛ニ命ジテ曰ク、謹テ之ヲ藏メヨト、三年ヲ經テ、會利勝ノ刀緤ノ末解ケタルアリ、因テ急ニ仁兵衛ヲ呼テ曰ク、往年付スル所ノ絲ヲ持チ來レト、仁兵衛乃チ之ヲ腰

袋ヨリ取り、呈シテ曰ク、謹テ奉還スト、利勝手自ラ緤末ヲ結び、欣然トシテ重臣ヲ召シテ曰ク、寡人、甚タ仁兵衛ガ謹懃ニシテ、主命ヲ重ンズルヲ嘉ニス、抑、唐絲ハ、彼土蠶婦ノ手ヨリ成リ、諸方ノ商人ニ展轉シ、千里ノ波濤ヲ踰エテ、始メテ我國ニ入ルモノナレバ、其人力ヲ勞スル、如何バヤ、而シテ今、寸許ト雖モ、之ヲ流塵ニ委スルハ、是人力ト天物トヲ棄ツルナリ、仁兵衛ノ守テ失ハサル、唯我ニ事ヘテ、謹懃ナルノミニ非ズ、之ヲ天ニ事フル者ト謂フベキナリ、其レ祿三百石ヲ増加セ

ヨ、

#### 第四章

○越後國ノ孝子市郎兵衛朝ハ早ク起キテ火ヲ  
焚キ湯ヲ沸カシ家ノ内外ヲ掃除シ爐邊ニ席ヲ  
布キ然ル後親ノ寢室ヲ伺ヒ其起キ出ルヲ待チ  
之ヲ扶持シテ彼ノ席ニ坐セシメ水ヲ捧ケ髪ヲ  
梳ルヲ毎日ノ務メトセリ故ニ第一卷ニモ此父  
子禮容アリテ其髮結ハザルヲ見ル者ナシト云  
ヘリ而シテ夜ハ必ズ父母ノ床ヲ設ケ其寢ヌル  
ヲ待テ然ル後ニ卧セリ父或ハ鄰里ヘ出テ夜ニ

入レバ必ス自ラ迎ヒニ行キ父尚ホ其家ニテ快  
ク談話スレハ其興ヲ妨ケンコトヲ恐レ密カニ其  
近傍ノ家ニ至リ父ノ歸ルベキ頃ヲ待チテ始メ  
テ迎ヘ歸リケリ其心ヲ用フルト大率此ノ類ナ  
リ

○丹波ノ孝子蘆田七左衛門出前ハ夏夜父母眠リ  
ニ就ク迄ハ枕ヲ扇ギテ涼ウシ冬夜ノ寒冷ナル  
時ハ先ヅ已カ膚ヲ以テ父母ノ衾褥ヲ温タメ或  
ハ父母ノ足ヲ已カ懷口ニ入レ常ニ父母ニ安眠  
セシメンコトヲ心トセリ故ニ其妻モ亦能ク七左

衛門ガ意ヲ承ケテ、舅姑ニ事フル、頗ル至レリ。  
○宋ノ黄履字ハ安中、晨ニハ、早ク起キテ、書ヲ誦スル、五百遍、夜ハ、誦スル、三百遍ナリ、誦スル毎ニ、端坐シテ動カズ、句々分明ナリ。

○徳川台徳公、嘗テ病ニ寢ヌル、數旬ナリシモ、未ダ敢テ一朝モ、髮ヲ梳ル、ヲ廢セズ、人ニ語テ曰ク、我斯ク病ムト雖モ、天下ノ政ハ、敬ンデ之ヲ聽カガルベカラズ、豈蓬頭垢面ニシテ、之ニ接スベキモノナランヤト、其謹慎ナル、概予此類ナリ。

○森蘭丸ハ、織田信長ノ近臣ナリ、謹慎ニシテ、聰慧ナリ、信長甚ダ之ヲ愛寵ス、嘗テ其才ヲ試ミント欲シ、命ジテ前堂ノ紙障ヲ闔デシム、蘭丸往キテ之ヲ見ルニ、紙障闔ジタリ、乃チ緩ヤカニ開キテ、堅ク之ヲ闔デ、然ル後ニ及命ス、信長曰ク、障果シテ開ケタリシヤ、蘭丸跪キ對ヘテ曰ク、君、臣ニ命ジ、紙障ヲ闔デシム、若シ其既ニ闔ヅルヲ視テ、徒ニ歸ラバ、是君ノ命ヲ廢スルナリ、故ニ謹デ開キテ、復タ之ヲ闔ヅト、

○大猷公德川家光ハ、台徳公ノ子ナリ、台徳公一

日、猿樂ヲ觀ル、諸侯群臣皆陪侍ス、會地大ニ震ス、陪侍ノ者皆避ケ去ル、台徳公ハ儼然トノ動カズ、時ニ大猷公、屏風ヲ隔テ、坐ス、青山忠俊、公ヲ抱テ出テントス、公問フ、殿下出ルヤ否ヤ、忠俊曰ク、知ラズ、公怒テ曰ク、安ンゾ、殿下未ダ出デザルニ、吾獨リ之ヲ避クル、アラント、公時ニ年十二ナリ、聞ク者歎服ス、

○北魏ノ楊椿、兄弟相事フル、父子ノ如キアリ、椿坐ヲ命ゼザレバ、弟津敢テ坐セズ、椿逝ク出デテ、日斜ナルモ、歸ラザル、アレバ、津先ヅ飯セズ、

椿歸テ、然ル後ニ共ニ食ス、食スレバ、津親ラ匙箸ヲ進ム、椿食ヲ命ジテ、然ル後食ス、椿嘗テ肆州ニ官タリ、椿ハ京ノ宅ニ在リ、四時ノ嘉味アル毎ニ、使ノ次デニ因テ、之ヲ贈ル、若シ未ダ寄セサル、アレハ、津先ヅ口ニ入レズ、

○明ノ楊翥、嘗テ夜夢ム、誤テ人ノ園林ニ入テ、私カニ人ノ二桃ヲ食フト、既ニシテ寤ム、深ク自ラ咎メテ曰ク、吾必ず且晝ノ義心明カナラズ、以テ此ヲ致スナリト、之ガ為メニ、三日餐セス、

○前漢ノ王吉、東隣ニ棗アリ、吉ノ庭ニ垂ル、妻之



ヲ取テ食フ、吉其妻ヲ逐ヒ出ス、隣人棗ノ為メノ  
故ナルヲ知テ、其樹ヲ伐ラントス、郷里之ヲ止  
メ、為メニ婦ヲ迎ヘテ歸ル、後ニ至リ漢ノ宣帝、吉  
ヲ諫議大夫ニ拜ス、終身義ニ非ザレバ取ラズ、  
○元ノ許衡嘗テ暑中ニ河南ヲ過グ、喝キテ甚ダ  
シ、道ニ梨アリ、衆爭ヒ取リテ之ヲ食フ、衡獨リ樹  
下ニ危坐シテ、自若タリ、或之ヲ問フ、衡曰ク、其有  
ニ非ズシテ之ヲ取ルハ不可ナリ、人曰ク、世亂レ  
テ此レ主ナシ、衡曰ク、梨主ナキモ、吾カ心獨リ主  
ナカランヤ、

第五章

○呂正獻公名ハ公箸、宋人ナリ、少カキヨリ嗜慾  
ヲ寡クシ、滋味ヲ薄クシ、凡ソ嬉笑俚近ノ語未ダ  
嘗テ口ヨリ出ダサズ、世利紛華、聲伎遊宴ヨリ博  
奕奇玩ニ至ルマデ、淡然トシテ好ム所ナシ、

○宋ノ范文正公、名ハ仲淹、少カキヨリ大節アリ、  
常ニ自ラ稱シテ曰ク、士ハ當サニ天下ノ憂ヒニ  
先ダチテ憂ヒ、天下ノ樂ニ後レテ樂ムベント、  
其將相トナルニ及ビ、日夜太平ヲ興致セシヲ  
謀慮ス、其母ヲ喪セシ時、尚ホ貧シ、故ヲ以テ身ヲ

終ル迄、賓客ニアラザレバ、食ニ肉ヲ重子ズ、其已  
ヲ行ヒ事ヲ作ス、竟ニ先憂後樂ノ意ニ外ナラ  
ズ、

○野相公篁ハ、參議小野岑守ノ子ナリ、少カキ時、  
馬ヲ馳スルヲ好ミ、學業ヲ事トセズ、嵯峨天皇、之  
ヲ聞キ給ヒテ、歎ジテ曰ク、斯ノ人ノ子ニシテ、馬  
ヲ馳スルヲ好ミ、學業ヲ事トセザル、惜ムベキ  
ニ非ズヤト、篁是ヨリ慚悔シテ、始メテ學ニ志シ、  
弘仁中ニ及第シ、官ヲ累子テ、參議左大辨ニ至ル  
文章當時ニ冠絶シ、尤モ草隸ニ妙ナリ、

○島東臯少年ノ時、三絃ヲ弄スルヲ好ム、一日、  
聖學ノ要ヲ聞キ、慨然トシテ歎ジテ曰ク、豈復タ  
此物ヲ弄センヤト、火ニ投ジテ之ヲ焚ク、

○織田信長、少カキ時、放縱ニシテ、動止常アラズ、  
平手政秀、屢之ヲ諫ム、信長聽カズ、政秀憂懣シテ  
曰ク、吾保傳ノ任ニ在リテ、匡救スル能ハズ、何ヲ  
以テ人間ニ視息センヤト、諫書一封ヲ留メテ、遂  
ニ自殺ス、信長驚惋シテ自ラ咎メ、屏居出デズ、為  
メニ佛寺ヲ建テ、名ヅケテ政秀寺ト曰フ、忌日ニ  
ハ必ズ詣リテ香花ヲ供ス、自ラ誓テ曰ク、吾徒ニ

悔ルモ益ナシ、當サニ過ヲ改メ行ヲ勵ム、大功ヲ  
天下ニ立テ、以テ前失ヲ償フベキノミト、益武  
事ヲ講シ兵備ヲナシ、天正中ニ至リ、遂ニ天下ノ  
大半ヲ定ム、威名京畿ニ藉々タリ、近臣或ハ媚ヲ  
獻ジテ曰久政秀曩ニ君ノ大業ヲ成ス、此ノ如キ  
ヲ察セズシテ、早ク自ラ死ヲ決セシハ、性急ト謂  
フベシ、信長色ヲ作シテ曰久、言何ゾ妄ナル、當初  
政秀、一死ノ諫メナカリセバ、吾何ヲ以テ、此ニ至  
ルヲ得シ、吾ガ今日アルハ、皆政秀ノ力ナリ、汝  
乃チ目スルニ、性急ヲ以テスル、唯ニ政秀ニ無禮

ナルノミナラズ、吾ヲシテ追悔感々トシテ、已ム  
コト能ハザラシム、汝ガ言ノ妄モ、亦甚ダシカラズ  
ヤ、

○晉ノ皇甫謐少カクシテ學ヲ好マズ、游蕩度ナ  
シ人以テ癡トス、其叔母任氏之ヲ責メテ涕ヲ流  
スニ至ル、謐乃チ感激シ、郷人某ニ就キ、書ヲ受ケ、  
勤學懈ラズ、謐家貧シ、躬自ラ稼穡シ、經ヲ帶ビテ  
鋤キ、遂ニ大儒ト成ル、學者號シテ、玄晏先生ト為  
ス、

○唐ノ趙武孟、少カクシテ游獵ヲ好ミ、獲ル所ヲ

以テ其母ニ饋ル、母泣テ曰ク汝書ヲ好マズシテ遊蕩ス、吾安ンゾ望マンヤト、為メニ食セズ、武孟感激シ、遂ニカ學シテ、右臺侍御史トナリ、河西人物志一篇ヲ著ス、

○管原麟嶼、天性警悟ナリ、四歳ニシテ、能ク稗史ヲ讀ム、人皆神童ト稱セリ、初メ荻生徂徠ニ就テ學ビ、後伊藤東涯ニ從フ、年十三ニシテ、幕府ノ儒官トナリ、聲名一時ニ藉々タリ、太宰春臺屢之ヲ規戒ス、其書ニ曰ク、純足下ヲ識ルヨリ、數年ナリ、今ヲ以テ前に較スルニ、進ム所ヲ見ズ、進ム所ハ、

唯。笛。ヲ。吹。ク。ノ。ハ。ミ。又。曰。ク。足。下。ノ。患。ハ。奉。養。太。ダ。厚。久。安。逸。度。ニ。過。ギ。テ。自。ラ。其。疾。ヲ。崇。ク。ス。ル。ニ。ア。リ。ト。麟。嶼。遂。ニ。年。二。十。四。ニ。シ。テ。歿。シ。學。業。秀。實。ニ。至。ラ。ザ。リ。シ。ハ。此。書。中。ニ。云。ヘ。ル。如。ク。欲。ニ。徇。フ。ト。樂。ミ。ニ。流。ル。ト。ノ。為。メ。ナ。リ。シ。ト。

○川井東村、酒ヲ飲ムヲ好ム、父母之ヲ憂フ、醫林玄伯告グルニ、痛飲身ヲ傷ブ、少親ヲ怠ルハ、ハ罪ヲ以テス、東村是ヨリ親戚義故ハ、宴集ヲ除ク外、敢テ酒ヲ飲マズ、

○池部汝玉、少カクシテ、豪飲ヲ好ム、既ニシテ、幡

然トシテ改メテ曰ク是志ハ懈ラシ生ヲ傷ナフト、禮飲數爵ノ外、斷然唇ヲ露サズ、

○晋ノ陶侃大將軍トナリテ、武昌ニ在リ、佐史ト酒ヲ飲ムニ常ニ限リアリ、歡ヲ盡サズ、殷浩少コシク進メンコヲ勸ム、侃懷然トシテ曰ク昔、少年ハ時、酒失多クシテ、慈親ニ戒メラル、故ニ敢テ過ハサハルハミ、

○紀長谷雄、幼ニシテ穎敏ナリ、學ヲ管公道真ニ受ク、管公大ニ其文藻ヲ歎稱ス、官ヲ累子テ、中納言ニ至ル、當時ノ詔勅、多ク其手ニ出ヅ、三善清行、

嘗テ長谷雄ト文ヲ論シ、詬罵シテ曰ク古ヨリ不才ノ博士アルコナシ、今汝ニ始マルト、長谷雄、校セズ、人其雅量ニ服ス、

○藪内匠人ト為リ深沈ニシテ、器局アリ、中村一氏ニ仕ヘテ、屢戰功アリ、豊公秀吉ノ北條氏ヲ征スルヤ、一氏山中城ヲ攻メテ之ヲ拔ク、内匠先登ス、渡邊了之ニ次グ、了ガ背旗甚ダ大ナリ、秀吉遙ニ望見シテ了ヲ以テ先登セリト為シ、其功ヲ賞セラル、内匠敢テ爭ハズ、既ニシテ一氏二人ニ祿各三千石ヲ與ヘ、内匠ニ賜フニ、現石ヲ以テス、了

心ニ平カナラズ、遂ニ仕ヲ辭シテ去ル、去ルニ臨  
テ、使ヲ内匠ノ許ニ遣リテ曰ク、願クハ子ト郊ニ  
相見ント、内匠即チ往ク、了馬上ニ偃月刀ヲ横タ  
ヘ、内匠ヲ邀ヘ、之ヲ勞シテ曰ク、吾將サニ遠行セ  
ントス、故舊ト訣別セズンバアルベカラズ、然レ  
故舊中、別レヲ告グベキ者ハ、獨リ君アルノミト  
因テ刀ヲ捧ゲテ之ヲ授ク、言恭シクシテ、色怒レ  
リ、内匠神色自若トシテ、進テ刀ヲ受テ、曰ク、吾モ  
亦君ニ驢セント、乃チ佩ブル所ノ刀ヲ脱シ、之ニ  
與ヘテ別ル、人皆之ヲ壯ナリトス、

○土佐ノ碩學、大高阪芝山、適從録ヲ著シテ、伊藤  
仁齋ノ學術ヲ排撃ス、仁齋ノ弟子之ヲ觀テ、仁齋  
ニ告テ曰ク、先生請フ之ヲ辯ゼヨ、仁齋微笑シテ  
應ゼズ、弟子神色奮厲シテ曰ク、先生辯ゼズンバ、  
弟子且ツ之ニ任ゼン、仁齋徐ニ答ヘテ、曰ク、我非  
ニシテ、彼是ナラバ、我從テ之ヲ改メ、ン、彼非ニシ  
テ、我是ナラバ、亦何ソ辯ゼント、

○漢ノ張良、嘗テ間歩シテ、下邳ノ圯上ニ游ブ、一  
老人アリ、良ノ所ニ至リ、履ヲ圯下ニ墮ス、顧ミテ  
良ニ謂テ曰ク、孺子下テ履ヲ取レ、良愕然トシテ、

之ヲ歐タント欲ス、其老イタルガ為メニ、乃チ強  
忍シ、下テ履ヲ取ル、因テ長跪シテ之ヲ進ム、老人  
足ヲ以テ之ヲ受ケ笑テ去ル、老人去ル、里許ニ  
シテ復タ還リテ曰ク、孺子教フ可シ、後五日ノ平  
明ニ、我ト此ニ會セヨ、良因テ之ヲ怪ミ、跪テ曰ク、  
諾ト、五日ノ平明ニ、良往ク、老人已ニ先ツ存リ、怒  
テ曰ク、老人ト期シテ後レタルハ何ゾヤ、去レ、後  
五日蚤ニ會セヨ、五日ノ鶏鳴ニ往ク、老人又先ツ  
在リ、復タ怒テ曰ク、後レタルハ何ゾヤ、去レ、後五  
日復タ蚤ニ來レト、五日ニシテ、良夜半ニ往ク、頃

ラクアリテ、老人亦來ル、喜テ曰ク、當サニ是ノ如  
クナルベシト、一編ノ書ヲ出シテ曰ク、此ヲ讀マ  
バ、王者ノ師ト為ラント、遂ニ去テ見エズ、且日其  
書ヲ視レバ、乃チ太公望ノ兵法ナリ、良因テ之ヲ  
異トシ、常ニ習誦ス、後遂ニ高祖ヲ佐ケテ、秦ヲ破  
リ、楚ヲ亡シ、漢ノ帝業ヲ立ツ、

○漢ノ韓信ハ、淮陰ノ人ナリ、淮陰ノ少年、嘗テ信  
ヲ侮テ曰ク、汝長大ニシテ、劔ヲ帶フト雖モ、中心  
ハ怯キノミ、能ク死セバ、我ヲ刺セ、死スル、能ハ  
ズバ、我跨下ヲ出テヨト、是ニ於テ信熟視シ、俛シ



テ、跨下ヲ出ヅ、一市ノ人、皆信ヲ笑ヒ、以テ怯シト  
ス、後ニ漢ノ大將ト為リ、高祖ヲ佐ケテ、楚ヲ滅シ、  
天下ヲ定メ、蕭何張良ト拜セテ三傑ト稱ス、

○唐ノ張公藝、九世同居ス、北齊隋唐、皆其門ニ旌  
表ス、麟德中、高宗泰山ニ封ズ、其它ニ幸シ、公藝ヲ  
召シ見テ、能ク族ヲ睦シクスル所以ノ道ヲ問フ  
公藝紙筆ヲ以テ對ヘント請ヒ、乃チ忍ノ字百餘  
ヲ書シテ、以テ進ム、其意ニ以為久宗族ノ協ハザ  
ル所以ハ、尊長ノ衣食或ハ均シカ、ラザルトアリ、  
卑幼ノ禮節或ハ備ハラザルトアルヲ互ニ相責

望スルニ由テ、遂ニ乖爭ヲナスナリ、苟モ能ク相  
與ニ之ヲ忍ベバ、則チ家道雍睦スト、

○宋ノ富鄭公名ハ弼、嘗テ子弟ヲ訓ヘテ曰ク、忍  
ノ一字ハ、衆妙ノ門ナリ、若シ清儉ノ外更ニ一ノ  
忍ヲ加ヘバ、何事カ辨ゼザラント、弼少時人之ヲ  
詬罵セル者アリ、弼之ヲ聞カザル者、如シ、或之  
ヲ告ク、弼曰ク、恐クハ是レ他人ヲ罵ルナラ、或  
曰ク、明カニ公ノ名ヲ呼ベリ、弼曰ク、天下豈同名  
ハ者ナカランヤト、罵ル者之ヲ聞テ大ニ慙シ、  
○明ノ夏原吉、德量寬厚、人能ク及ブコナシ、或原

吉ニ問フ、量ハ學ブベキヤ、原吉曰ク其幼キ時犯  
ス者アレバ、怒ラズンバアラズ、始メハ色ニ忍ビ、  
終リニハ心ニ忍ブ久シケレバ、自ラ習熟シ、殊ニ  
人ト較セズ、何ゾ、學ブベカラザラン、

### 第六章

○畠山重忠、人トナリ誠實ナリ、源頼朝ニ事ヘテ  
忠勇雙ビ無シ、文治中、伊勢ノ神人家綱ト云フ者、  
頼朝ニ訴ヘテ曰ク、重忠が目代某、恣ニ神戸ヲ鈔  
暴セリト、頼朝怒テ重忠ノ采邑ヲ削リ、千葉胤正  
ノ第二拘ス、重忠食ヲ絶ツ、七日、口ヲ杜ガテ言

ハズ、胤正其狀ヲ告ウス、頼朝大ニ驚キ、釋シテ召  
シ見ル、重忠拜謝シ、乃チ等列ニ謂テ曰ク、凡ッ邑  
土ヲ受ル者、宜ク目代ヲ擇ブベシ、吾常ニ清潔ヲ  
以テ身ヲ律ス、今不良ハ人ニ任ジテ、自ラ此辱ヲ  
招ケリト、頼朝乃チ其二郡ヲ削リテ、本領ニ復セ  
シム、梶原景時、隙ニ投ジテ讒シテ曰ク、重忠怨望  
シ、邑ニ據テ叛クト、頼朝、結城朝光、下河邊行平ヲ  
召シテ、之ヲ議ス、朝光曰ク、重忠嚮ニ目代ノ姦宄  
ヲ以テ、暫ク譴怒ニ遭フ、此時ニ當リ、唯自ラ罪ヲ  
引キ、曾テ怨色ナシ、其人平生忠直ニシテ、義ヲ慕

ヲ決シテ異圖ヲ懷クノ理ナシ、宜ク之ヲ召シ見  
テ面タリ其情狀ヲ察スベシト、頼朝之ヲ然リト  
シ、行平ヲ遣ハシテ、之ヲ召ス、重忠乃チ行平ト俱  
ニ鎌倉ニ至リ、景時ニ由テ陳謝ス、景時曰ク、子實  
ニ反謀ナクバ、宜ク誓書ヲ獻ズベシ、重忠曰ク、我  
既ニ身ヲ幕府ニ委子、毫モ貳ヲ懷カズ、而シテ今  
讒謗ニ遭フ、實ニ不幸ニ出ヅ、我レ心ト言トニツ  
ナシ、何ゾ誓書ヲ煩ハサン、且ツ盟誓ハ、姦詐ヲ防  
グ所以ナリ、我が赤心ハ、幕下ノ素ヨリ知ル所、子  
是ヲ以テ之ヲ白セ、景時乃チ入テ言フ、頼朝默然

タリ、召シ見ルニ及ビ、唯寒暄ヲ叙シ、一モ糾問ス  
ルナクシテ、事遂ニ釋ク、

○森蘭丸、嘗テ織田信長ノ刀ヲ奉ジテ、廁ニ在リ、  
刀鞘黒漆ニシテ、款紋數十條アリ、蘭丸計ヘテ、其  
數ヲ記臆ス、信長之ヲ覩ヒ知リテ、而シテ言ハズ、  
數日ヲ經テ、左右近臣ヲ集メ、其刀ヲ撫シ、之ニ謂  
テ曰ク、能ク鞘上ノ款數ヲ、暗射スル者アラバ、乃  
チ此刀ヲ與ヘント、衆爭フテ之ヲ射ス、中ル丁能  
ハズ、蘭丸獨リ默シテ言ハズ、信長問テ曰ク、汝何  
ソ之ヲ射セガル、蘭丸謹デ對ヘテ曰ク、臣嘗テ其

數ヲ料記セリ、今如シ知ラザル為シテ、之ヲ申ルハ、臣が深ク耻ル所ナリ是ヲ以テ敢テ言ハズト、信長、其誠直ニシテ、欺カザルヲ悦ビ、賜フニ其刀ヲ以テス、

○河村權七ハ、加藤嘉明ニ事ヘ、勇武ヲ以テ名アリ、慶長五年、石田三成、諸將ノ妻子ヲ、大坂城中ニ、質トナサントスルヤ、權七、嘉明ノ夫人ヲ護シテ、之ヲ脱セシメ、關原ノ役ニハ、血戰シテ大功アリ、爾後故アリテ、出奔スル時、一書ヲ嘉明ニ遺シテ曰ク、臣出奔スト雖モ、決シテ貳心アルニアラズ、

若シ君家ニ開スル事變アルカ聞カバ、何ハ地ニ在リト雖モ、必ス奔馳シ來リテ、平生ノ恩ニ報ズベシト、是ヨリ權七、各地ニ漫遊シ、旅費モ既ニ乏シケレハ、修驗者トナリテ、出羽國ニ月日ヲ送リケル、會大坂ノ役起ルヲ聞クヤ、權七直チ、出羽ヨリ馳セ、夜加藤氏ノ邸ニ至リ、其舊友ニ頼リ、嘉明ニ謝罪シテ、謁ヲ請フ、嘉明乃チ之ヲ召シ見テ、其來ルノ速カナルヲ稱シ、舊ニ依リテ、祿八百石ヲ與フ、且ツ吏ヲシテ其出國セシ以來、十四年間、合計一萬千二百石ノ俸米ヲ金ニ換ヘ、權七が前

ニ列セシム、權七驚キ且ツ歎ジテ曰ク、十四年間ハ、漫遊シテ、職ヲ奉ジタルニ非ズ殊ニ初メ許可ヲ待タスシテ、出奔ス、其再ビ仕ルヲ得ル、恩猶ホ餘リアリ、何ゾ漫遊中ノ祿ヲ受クベケンヤト、再三固辭シテ、受ケズ、嘉明之ヲ聞テ曰ク、權七が辭スル所、當然ナリ、然リト雖モ、其初メ國ヲ出ルニ當リ、一書ヲ留メテ、其心ヲ貳セザルヲ明カニシ、我家ニ事アル時ハ、何ノ地ニ在ルモ、必ず奔馳シ來リテ、報効スベシト云ヘリ、權七ハ十四年間、此一言ヲ守リ、今日我家ニ事アルニ當リテ、身ヲ致

シ命ニ歸ス、其臣タルノ義ヲ盡クスノ固キ、豈常法ヲ以テ、之ヲ待ツヘケンヤト、強テ給與セラレケリ、

○魏ノ遼東公翟黑子、武帝ニ寵アリ、使ヲ并州ニ奉ジテ、賄賂ヲ受ク、事發覺セリ、黑子之ヲ高允ニ謀ル、允が曰ク、公ハ帷幄ノ寵臣ナリ、罪アルモ、實ヲ首セバ、或ハ原サル、ニ近カラン、重子テ欺罔ヲナスベカラズ、或曰ク、若シ實ヲ首セバ、罪測ルベカラズ、姑ク之ヲ諱ムニ如カズ、黑子、允ヲ怨テ曰ク、君奈何ンゾ、人ヲ誘テ、死地ニ就カシムルト、

入テ帝ニ見エ、實ヲ以テ對ヘズ、帝怒テ之ヲ殺セ、  
リ、帝允ヲシテ、太子ニ經ヲ授ケシム、崔浩ガ允等  
ト史ヲ修シテ、直筆ヲ著ハシ、石ニ刻シテ、國惡ヲ  
暴揚スルニ當リテ、太子、允ニ謂テ曰ク、入テ至尊  
ニ見エバ、吾自ラ郷ヲ生路ニ導カン、至尊問フ  
アラバ、但、吾ガ語ニ從ヘト、太子、帝ニ見エテ言フ、  
高允ハ、心ヲ小ニシ、慎密ニシテ、且ツ微賤ナリ、其  
著述ヲ制スルハ、皆崔浩ニ由ル、請フ允ガ死ヲ赦  
セ、帝、允ヲ召シテ問テ曰ク、國書ハ、皆浩ガ為ル所  
力、對ヘテ曰ク、臣ト、浩ト、共ニ之ヲ為セリ、然レ、浩

ガ、領ズル所ハ、事ハ、多ク總裁スルハミ、著述ニ至  
テハ、臣、浩ヨリ、多シ、帝怒テ曰ク、允ガ罪、浩ヨリ甚  
クシ、何ヲ以テ生カスコトヲ得ン、太子懼レテ曰ク、  
天威嚴重ニシテ、允ハ小臣ナリ、迷亂シテ對ル所  
ヲ失フノミ、臣、子嚮ニ問ヘバ、皆浩ガ為ル所ト云  
ヘリ、帝、允ニ問フ、信トニ東宮<sub>太子</sub>言フ所ノ如キ  
カ、允曰ク、臣ガ罪當サニ誅セラルヘシ、敢テ虚妄  
セズ、殿下<sub>太子</sub>臣ガ侍講、日久シキヲ以テ、臣ヲ哀レ  
ミテ、其生ヲ乞ハント欲スルノミ、殿下<sub>太子</sub>實ニ臣  
ニ問ハズ、臣モ、亦此ハ言ナシ、敢テ迷亂セズ、帝顧

ミテ太子ニ謂テ曰ク直ヒ哉此レ人情ノ難キ所  
而シテ允能ク之ヲ為ス死ニ臨テ辭ヲ易ヘザル  
ハ信ナリ臣ト為リテ君ヲ欺カザルハ真ナリ宜  
ク特ニ其罪ヲ除シテ以テ之ヲ旌ハスベシト遂  
ニ之ヲ赦ス

○宋ノ徐積初メテ胡安定ヲ見ル頭ノ容稍偏セ  
リ安定聲ヲ厲マシテ曰ク頭ノ容直キヲ要ス徐  
驚キ起チテ自ラ思フ特ニ頭ノ容直キヲ要スル  
ハミナラズ心モ亦直キヲ要スベシト此ヨリ敢  
テ邪心アラズ

○宋ノ劉元城司馬溫公ヲ見テ心ヲ盡シ已ヲ行  
フノ要以テ終身之ヲ行フベキ者ヲ問ス溫公曰  
久其レ誠カ元城問フ之ヲ行ス何ヲ先ニセシ溫  
公曰久妄語セザルヨリ始ム元城初メ甚ダ之ヲ  
易シトス退テ自ラ省察スルニ及テ日ノ行フ所  
ト其言フ所ト相合ハザル者多シカメ行フ所  
年ニシテ然ル後ニ表裏相應ジ言行一致ナリ  
○宋ノ賈黯狀元及第二中リテ鄧州ニ歸ル范文  
正州ノ守タリ黯文正ヲ見テ曰ク黯晚進偶科第  
ヲ得タリ願クハ教ヲ受ケン文正曰ク久不欺ノ二



字。以。テ。終。身。之。ヲ。行。フ。ベ。シ。黠。教。ヘ。テ。受。テ。忘。レ。ズ。  
每。子。ニ。人。ニ。語。テ。曰。久。吾。レ。范。公。ヨ。リ。二。字。ヲ。得。タ  
リ。一。生。之。ヲ。用。ヒ。テ。盡。キ。ズ、

○宋ノ寇萊公名ハ準、年十九歳ニシテ、進士ノ第  
ニ登ル、時ニ太宗多ク其年ヲ問ヒ、年少ノ者ハ、往  
々ニ罷遣ス、或寇準ニ教ヘテ、其年ヲ増サシム、準  
答ヘテ曰久、用舍分アリ、吾初メテ進取ス、詐ヲ行  
ヒ、以。テ。其。君。ヲ。欺。ク。ベ。ケ。ン。ヤ、

○滋野朝臣貞主ハ、仁明天皇ニ事ヘ、官ヲ累子テ、  
參議兼宮内卿ニ至レリ、天性仁慈ニシテ、常ニ其

辭。ハ。未。ハ。人。ヲ。損。コ。ナ。ハ。ン。丁。ヲ。恐。レ。妄。リ。ニ。人。ハ。  
善。惡。ヲ。言。ハ。ズ、善人ハ、下流ニ沈滞セルヲ見レバ、  
其能ヲ稱シ、務メテ之ヲ薦揚セラレケリ、其用意  
此ノ如クナルヲ以テ、生涯ニ德ノ人ニ及ブモノ  
限リナク、仁壽二年ノ春、逝去ノ時、世ノ人、知ルト  
識ラサルトヲ論セズ、皆流涕シテ、惋惜セシト云  
フ、

○東漢ノ卓茂、寬仁恭愛ニシテ、束髮ヨリ、白首ニ  
至ルマデ、未ダ嘗テ人ト爭ヒ競ハズ、鄉黨故舊、其  
行ヒ、茂ト同ジカラザル者ト雖モ、皆慕愛ス、初メ

密ノ令タリ、民ヲ視ル子ハ如ク善ヲ擧ゲテ教  
ズ。口ニ惡言ナシ、吏民親愛シテ、之ヲ欺クニ忍ビ  
ズ、數年ニシテ、教化大ニ行ハレ、道ニ遺チタルヲ  
拾ハズ、光武位ニ卽キ、首トシテ太傅ニ拜ス、  
○明ノ蔡虛齋、名ハ清、程朱ノ說ヲ奉ジ、學術淵深  
ナリ、嘗テ人ニ語テ曰ク、道德アル者ハ必ズ多言  
ナラズ、信義アル者ハ必ズ多言ナラズ、才謀アル  
者ハ必ズ多言ナラズ、唯彼ノ細人、狂人、妄人ハ、乃  
チ多言ナルノミ、

○晉ノ王獻之、嘗テ兄徽之、操之ト俱ニ、謝安ガ家

ニ詣ル、二兄多ク俗事ヲ言フ、獻之ハ、唯寒溫ヲ叙  
ブルノミ、既ニ出ヅ、客安ニ王氏兄弟ノ優劣ヲ問  
フ、安曰ク、小ナル者佳ナリト、客其故ヲ問フ、安曰  
ク、古云フ、吉人ノ辭ハ寡ナリト、其言少キヲ以  
テ、之ヲ知ル、

○宋ノ王文正公、名ハ旦、平生人ト、言笑スルト寡  
クナシ、其語簡ナリト、雖モ、能ク理ヲ以テ人ヲ服  
ス、默然タルト終日、能ク其際ヲ窺フモノナシ、事  
ヲ上ノ前ニ奏スルニ及デハ、群臣ノ異同アル、文  
正徐ニ一言シテ、以テ定マル、

○京師ノ風俗、各地神祠ノ祭日ニ、遠親故舊、互ニ相延請ス、雨森芳洲、少カキ時、揚言シテ曰ク、殊ニ其煩ヲ覺ユト、柳川滄洲坐ニ在リ、色ヲ正シテ曰ク、一年一次、團欒シテ澗ヲ叙ブ、人情是ニ於テ萃マル、何ソ煩ト謂フヤ、芳洲赧然ト懃服ス、  
○五井持軒、平生曾テ人ノ惡ヲ言ハズ、或ハ人ト語り、言當ラガルコアレバ、亦之ヲ斥ケズ、但、曰ク、某解セガル所多シト、曾テ人ニ謂テ曰ク、人惡ヲスルコト能ハザル者アリト、一書生アリ、遽ニ曰ク、吾輩然ルコト能ハズト、持軒色ヲ正シテ曰ク、意ハ

ガリキ、君ノ人ト為リノ爾ラントハ、惡若シ為スベクンバ、試ニ之ヲナセ、

○明ノ文徵明、衡山ト號ス、平生、人ノ過ヲ聞クコトヲ喜バズ、若シ言ヒ及バントスル者アレバ、必ず巧ニ他端ヲ以テ、之ニ易ヘ、其說ヲ竟ヘシメズ、其子震孟、狀元ニ及第シ、名行俱ニ高シ、

○南容ハ、孔子ノ弟子ナリ、南宮ニ居ル、故ニ南宮适氏稱ス、深ク言ヲ慎ムニ意アリ、日ニ白圭ノ詩ヲ三復ス、其辭ニ曰ク、白圭ノ玷ゲクルハ、尚ホ磨クベキナリ、斯ノ言ノ玷ゲタルハ、為ベカラザル

ナリト故ニ孔子之ヲ稱シテ曰ク邦道アラバ、廢  
テラレジ、邦道ナキモ、刑戮ニ免カレント、其兄ノ  
子ヲ以テ之ニ妻アハセリ、

### 第七章

○後三條天皇、皇太弟タリシ時、僧成尊問テ曰ク、  
殿下常ニ北斗ヲ拜シ給フヤト、天皇曰ク月ニ必  
ズ一拜ス、敢テ踐祚ヲ祈ルニアラズ、然レ時アリ  
テ或ハ念フ位ニ即カバ云々セント、自ラ省ミル  
ニ、此念不忠ニ崩ス、因テ之ヲ拜シテ、其過ヲ悔ル  
ナリト、成尊感泣シテ退ク、

○瀧鶴臺ハ、長門國萩ノ藩士ナリ、學識德望並ビ  
高シ、同族某氏ノ女ニ、面貌極メテ醜黒ナル者ア  
リ、笄スルニ及テ、之ヲ娶ル人アルナシ、其父兄  
之ヲ憫ミテ曰ク、若シ汝ヲ娶ル者アラバ、賤人ト  
雖モ、嫁スルヲ許スベシト、然レ女ハ反テ其耦  
ヲ選ビ、常ニ人ニ語テ曰ク、鶴臺先生ノ如クナル  
人ヲ得テ、所天トセバ、我が願ヒ足ルト、人皆之ヲ  
哂ヘリ、會、鶴臺此語ヲ傳聞シテ曰ク、是我が知己  
ナリ、必ズ能ク内ヲ治メント、遂ニ之ヲ娶ル、女既  
ニ瀧氏ニ嫁シ、其言動、婉順聽從ナラザルナシ、鶴

臺客ト語レバ、婦人常ニ屏後ニ在テ、之ヲ聽久談  
或ハ忌諱ニ觸ル、モノアレバ、則チ之ヲ諫止ス、  
一日周旋ノ間、忽チ赤絲團アリ、其袖ヨリ出テ、地  
ニ墜チタリ、鶴臺恠テ之ヲ問ス、婦人赧然トシテ  
曰ク、妾ガ愚ナル、平日ノ行為、悔エベキ者多シ、心  
ニ其過ヲ少ナクセント欲ス、因テ赤白二個ノ絲  
團ヲ製シ、常ニ之ヲ兩袖ニ藏ス、若シ不良ノ念起  
コレバ、則チ赤絲ヲ結ビ、若シ善念アレバ、則チ白  
絲ヲ纏フ、初メ一二年間ハ、赤團益大ニシテ、白團  
ハ依然タリ、由テ惕然反省シ、益戒慎ヲ加ヘシニ、

今ハ赤白二團大サ相等シ、是亦良人薰陶ノ致ス  
所ナリ、但未ダ白團ハ、赤團ヨリ大ナルヲ見ザル  
ハ、ト更ニ一ノ白絲團ヲ袖中ヨリ出シテ、之ニ  
眎シケリ、

○北條泰時、政ヲ聽ク日、訟獄アリ、甲既ニ口ヲ極  
メテ、已カ理ヲ申陳ス乙者乃チ要ヲ執テ、對スル  
ニ及テ、甚ダ辭アリ、甲者憮然トシテ、覺エズ大息  
シテ曰ク、吁、吾屈セリト、聞ク者嗤笑ス、泰時獨リ  
感賞シテ曰ク、然ラズ、過ヲ知レ、改ムルヲ憚  
リ、遁辭シテ已マザルモノ、多クハ是訟者ノ情ナ

リ。吾訟ヲ聽ク。久シ。未ダ曾テ此人ノ如ク真率ニシテ過ヲ改ムルニ吝ナラザル者ヲ見ズト。遂ニ乙者ニ諭シテ其理ヲ中分ス。

○久留米侯有馬頼永江戸ニ在ル時、一二ノ近侍逢迎シテ淫逸ニ陷レントスル者アリ其父藩ヨリ至リテ之ヲ誡メ為メニ近侍ヲ黜久頼永深ク自ラ悔悟ス他日貞觀政要ヲ讀ム時重臣平佐佐平至リテ閑話ス頼永讀ヲ傳メテ之ニ應ズ話嚮キノ過失ニ及ブ諄々トシテ之ヲ言フ佐平去ルニ及デ頼永曰久佐平我ヲシテ内省セシム一語

ハ功貞觀政要一卷ヲ讀ムニ勝レリ、

○晋ノ周處贅力人ニ絶ズ細行ヲ脩メズ州曲之ヲ患ス處改メ勵ムノ志アリ父老ニ謂テ曰久今時和シ歲豐ナリ何ヲ苦ミテ樂シマザル父老歎シテ曰久三害除カズ何ノ樂ミカ之アラシ處曰久何ノ謂ヒバ父老答ヘテ曰久南山白額ノ猛虎長橋下ノ蛟ト子ヲ并セテ三トス處曰久吾能ク之ヲ除カント乃チ山ニ入テ躬ラ猛虎ヲ殺シ水ニ投シテ蛟ヲ搏殺シ遂ニ志ヲ勵ムシ學ヲ修ム文思アリ已ニ克ツト暮年州府交辟ス

○蔡齊酒ヲ好ム、既ニシテ第二登リ、齊州ニ通判  
タリ、日ニ醇酎ヲ飲ミ、往々醉ニ至ル、時ニ太夫人、  
年已ニ高シ、頗ル之ヲ憂フ、一日賈存道、齊ニ過グ、  
齊之ヲ舘スル數日、存道、齊ノ賢ヲ愛シ、其酒ヲ以  
テ學ヲ廢シ、疾ヲ生ゼン、乃チ詩ヲ作り  
テ齊ニ示ス、齊之ヲ讀ミ、矍然トシテ起テ之ヲ謝  
ス、是ヨリ親客ニ非ザンハ、酒ニ對セズ、終身未ダ  
嘗テ醉ニ至ラズ、

○唐ノ李安遠、少カクシテ撿束ナン、無頼ノ徒ト  
遊ビ、產ヲ破ブルニ至ル、晚ニ節ヲ折リ、學ニ嚮ビ、

士大夫ニ從フ、苟モ已レニ勝レバ、必ズ心ヲ傾ケ  
テ之ニ交ル、安遠後ニ懷州ノ刺史ニ至ル、

○仁德天皇、難波ニ都シ給フ、即位ノ四年、臺ニ登  
リテ、遠望セララル、ニ、人烟頗ル稀疏ナリ、天皇因  
テ、民間ノ窮乏ヲ察シ、給ヒ、詔シテ、課役ヲ除カセ  
ラル、丁三載、躬ラ節儉ヲ行ヒ、宮垣頽敗スレ、民  
葺セシメ給ハズ、是ニ於テ風雨時ニ順ヒ、五穀豐  
穰ナリ、三年ニシテ、百姓殷富、歡聲路ニ盈ツ、七年  
ノ夏、天皇臺ニ登リ、炊烟ノ稠ク起コルヲ見給ヒ、  
皇后ニ謂テ曰ク、朕既ニ富メリ、復タ何ゾ憂ヘン



ト、皇后曰ク、今ヤ宮室朽廢シテ、暴露ヲ免レズ、何  
ゾ富メリト謂ハン、天皇曰ク、君ハ民ヲ以テ本ト  
ス、民ノ貧キハ則朕ノ貧キナリ、民富メバ、朕モ亦  
富ムト、是歲諸國ヨリ、税調ヲ貢シ、宮殿ヲ修理セ  
ント請フ、聽サズ、十年ノ冬、始テ課役ヲ科シ、宮室  
ヲ造リ給ス、百姓老ヲ扶ケ、幼ヲ攜ヘ、先ヲ爭フテ  
來リ赴キ、日夜營作ス、幾クナラズシテ、宮室悉ク  
成レリ、

○奥貫五平次、友山ト號ス、武藏國入間郡河越ノ  
豪民ナリ、江戸ニ遊學シ、業成テ家ニ歸ル、寛保中、

關東洪水アリ、民舍湮沒、數十里ニ亘ル、友山食ヲ  
舟ニ載セ、餓者ニ施シ、病者ハ悉ク載セテ歸リ、其  
家ニ撫養スル者數百人、因テ其父ニ請フテ曰ク、  
大人平生、兒ニ誨フルニ、儉ヲカメ、用ヲ節スルヲ  
以テスル、豈今日ノ為メナラズヤ、願クハ家世ハ  
積聚スル所ヲ以テ、之カ賑恤ニ當テント、父喜デ、  
之ヲ許ス、是ニ於テ大ニ倉廩ヲ發キ、飢民ニ施與  
ス、之ヲ傳聞シテ、爭ヒ至ル者、門前市ノ如シ、既ニ  
シテ廩糧盡ク、又人ヲシテ金ヲ四方ニ齎ラシ、諸  
穀ヲ買テ之ニ繼グ、金モ亦盡ク、乃チ田宅ヲ江戸



ノ富商ニ質トシ、金ヲ借リテ之ヲ施ス。冬十月ヨリ翌年ノ四月ニ至テ止ム。恩德ノ及ブ所、四十八村、其救フ所ノ者、十萬六千餘人ナリ。事官ニ聞コエ、大ニ錢帛ヲ賜ヒ、門閭ニ旌表セララル。

○三浦梅園ハ、豊後ノ人ナリ、自ラ奉ズル節儉ナリ。孝子、順孫、節婦、義僕アレバ、梅園稱揚シテ、之ヲ顯シ、或ハ之ヲ官ニ請ヒ、褒賜ヲ得ヤシメ、或ハ之ヲ郷邑ニ募リ、以テ救助ヲ為シ、又自ラ米塩ヲ餽クリ、日月相給スル者アリ。其閭閻ノ子弟ニ於ケル、小善アレバ之ヲ褒ス、小惡アレバ之ヲ誡ム。是

ヲ以テ、人皆其嚴ヲ憚カリ、其惠ニ懷ツク。

○北魏ノ李士謙、嘗テ歲凶ニ値フ、粟千石ヲ出シテ、郷人ニ貸ス。明年又凶ナリ、人之ヲ償フヲ能ハス。士謙衆ニ對シ、券ヲ焚テ曰ク、債已ニ了ル、復タ償フヲ須ヒズト。明年大ニ熟ス、人爭テ之ヲ償フ、一モ受ル所ナシ。明年又大ニ凶ナリ、士謙家資ヲ竭シ、粥ヲ設ケテ以テ濟フ。全活スル者、萬ヲ以テ計フ。死者ハ為メニ之ヲ瘞ム。或曰ク、子ノ陰德大ナリト。士謙曰ク、陰德ハ猶ホ耳鳴ノ如シ、已自ラ之ヲ知リエ、人知ル者ナシ。子今已ニ知ル、何ゾ

陰德ト為スニ足ラント、後ニ子孫大ニ貴顯ナリ、  
○葛藤ハ宋ノ大觀年中ノ人ナリ、此人、事ノ大小  
輕重ニ因ラズ、日々人ヲ利益セント誓ヒ、昨日ハ  
一事人ヲ利益セリ、今日ハ十事利益セリト云フ、  
或怪ミテ、其利益スルノ方ヲ問フ、葛藤即チ履脫  
ギ、履ミ物ヲ指シテ曰ク、譬ヘバ、此履ノ倒マニ  
ナリタルヲ、人之ヲ著クルニ、便ナラザルベシト  
思ヘバ、正シク直ホシ置ク程ノ事モ、亦一ノ利益  
ナリ、事ノ大小輕重ニハ因ラズ、然レバ乞丐ト雖  
モ、苟モ其志アラバ、人ヲ利益スル能ハザルナ  
シ、只久シク行フヲ可トス、久シケレバ、必ズ天地  
神明ニ通ジテ福ヲ享クルヲ限リナシト、

○王丹ハ、漢ノ京兆下邳ノ隱者ナリ、平生、人ノ窮  
ヲ賑ハス、ト好ミ、又人ノ其家業ヲ善ク勤ムル  
ト喜ベリ、下邳ノ民ノ農事繁忙ナル時ハ、丹必  
ズ自ラ酒饌ヲ具シテ、田畝ニ至リ、善ク勞苦シテ  
業ヲ為ス者ニ、之ヲ進メ、怠惰ノ徒ニハ、毫モ之ヲ  
供セズ、故ニ人皆自ラ競ヒ、自ラ恥ヂ、各益努力セ  
リ、是ニ於テ下邳ノ民ハ、富マザルノ戸ナキニ至  
レリ、又死シテ葬リヲ為スヲ能ハサル者アレバ、

必ズ賻シテ、其儀ヲ為サシム、斯クノ如クスル、  
十有餘年一日ノ如シ、後、丹徵サレテ太子ノ太傅  
トナル、

○宋ノ王榮家頗ル厚シ、子ナキニ因リ、務メテ善  
事ヲ行フ、嘗テ大燈ヲ要路ニ建テ、月黒キ毎ニ點  
シテ行人ヲ照ラス、又小燈百枚ヲ設ケ、黑夜遠ク  
歸ル者ニ遇ヘバ、之ヲ給ス、天雨フレバ、木履雨傘  
ヲ施ス、是ノ如クスル、數年、連リニ二子ヲ生ム、  
聰明穎異ニシテ、皆進士ト成ル、

○明ノ楊榮ノ祖父ハ、渡ヲ濟スヲ以テ生業トス、

久雨水漲リ、民居ヲ衝毀シ、溺死スル者、流ニ順ヒ  
テ下ル、他舟皆財物ヲ取ル、獨リ楊榮ノ祖父ハ、人  
ヲ救フヲ以テ事トシ、財物一モ取ル所ナシ、鄉人  
其愚ヲ笑フ、後ニ楊榮位三公ニ至ル、

○宋ノ趙槩、平日瓶豆二物ヲ、几案ノ間ニ置キ、一  
念起ル毎ニ、善惡ニ隨ヒテ、之ヲ別テ、善ナレバ、一  
白豆ヲ、白瓶中ニ投ジ、惡ナレバ、一黒豆ヲ、黒瓶中  
ニ投ズ、初メハ黑豆甚ダ多シ、既ニシテ漸ク少ナ  
ク、久シクシテ絶エテ無キニ至リ、後ハ瓶豆モ亦  
用ヒザリシト云フ、

○明ノ楊瞻曰久現在ノ福祖宗ヨリ積ム者ハ惜  
マザル可カラズ將來ノ福子孫ニ貽ス者ハ培セ  
ザル可カラズ現在ノ福ハ燈ヲ點スルガ如シ隨  
テ點スレハ隨テ竭ク將來ノ福ハ油ヲ添ルガ如  
シ愈添レバ愈厚シ

○明ノ太祖嘗テ侍臣ト善惡ノ報或ハ爽ガフ者  
アルヲ論ズ上ノ曰ク惡ヲ為スモ或ハ禍ニ免カ  
ル然モ理ニ於テ為スベキノ惡ナシ善ヲナスモ  
未ダ必ズシモ福ヲ蒙ラズ然モ理ニ於テ為ス可  
カラザルノ善ナシ彼ノ善ヲ為シテモ福ナク惡

ヲ為シテモ禍ナキハ天道ノ不明ニアラズ特ニ  
時未ダ至ラザルノミ

修身小學口授本卷之二終

帆船  
雨過春陂  
柳花飛  
浪香

仙舟  
卷三

明治十八年七月廿二日版權免許  
同年十月出版

編輯人

新編

同 同 斜

吉田利行

福岡縣福岡區福岡西職人町六拾九番地

林 斧

同縣同區福岡箕子町百五番地

高田芳太郎

同縣同區博多麴屋町拾一番地

同 喜九郎

同縣同區博多町拾壹番地

同 長濱竹次郎

同縣同區福岡丁名鳴町五拾七番地